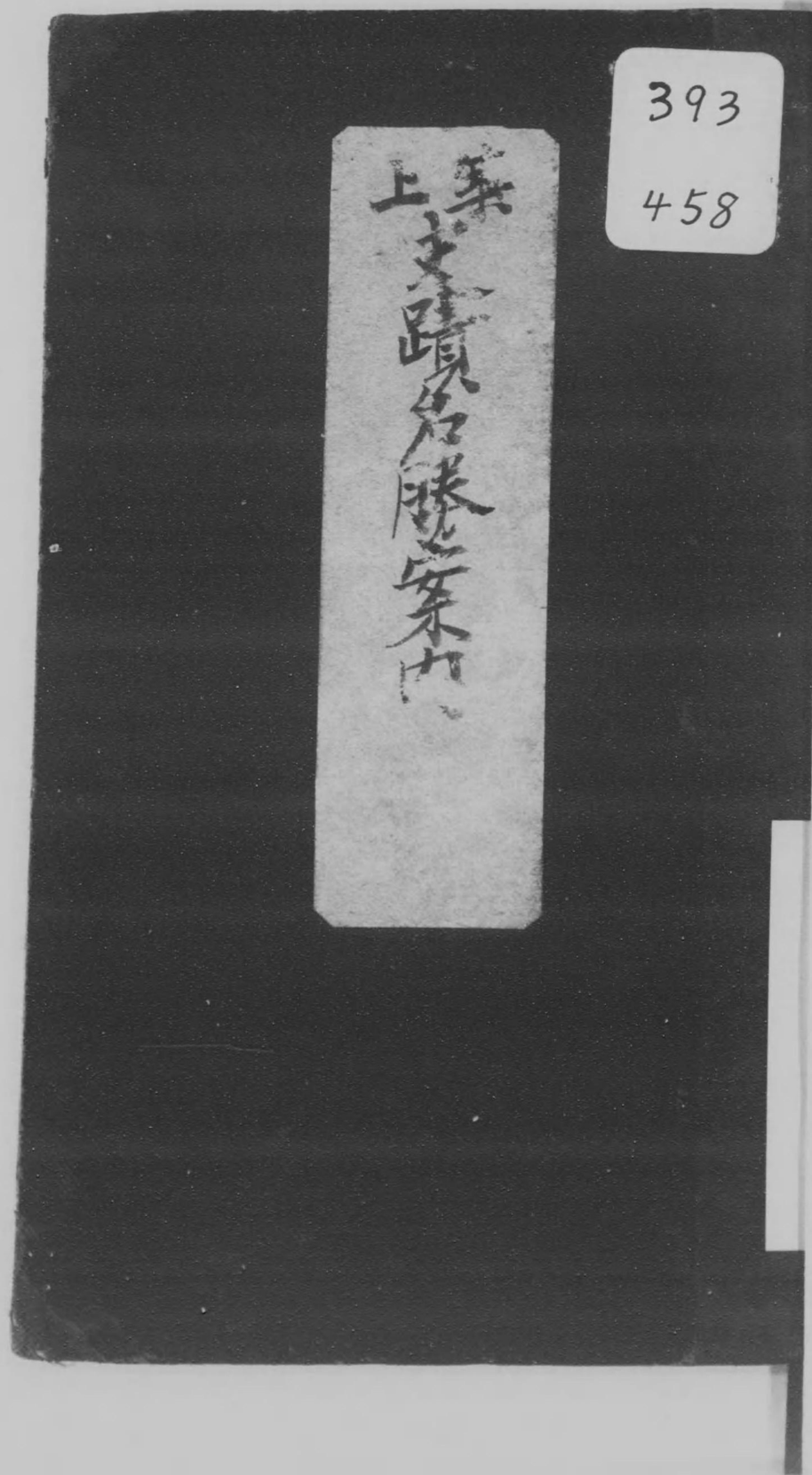
393
458



始

女儿的遗物在

福岡縣教育會長
神崎勳氏

福岡縣立築上中學校長

井上正信氏

陸軍騎兵大佐正五位勳四等

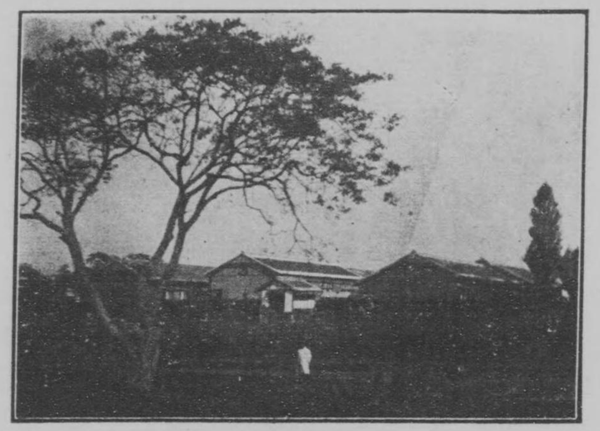
高橋喜七郎氏

八屋銀行常務取締役
水野與市氏

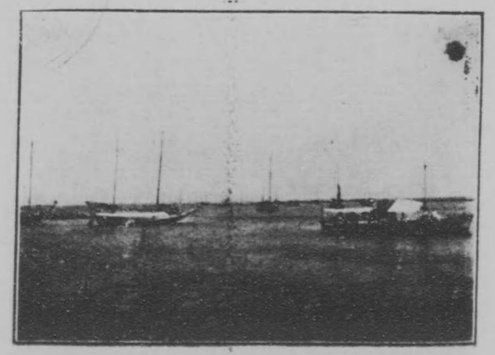
前宇島町長
小川勇次郎氏

八屋町齒科醫(分院)
池部三郎氏

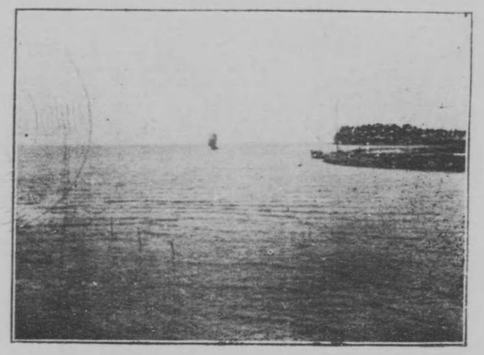
本書著者佐知芙蓉



福岡縣立築上高等女學校



埠頭ノ宇島港(宇島驛)



八屋ノ八尋濱（宇島驛）

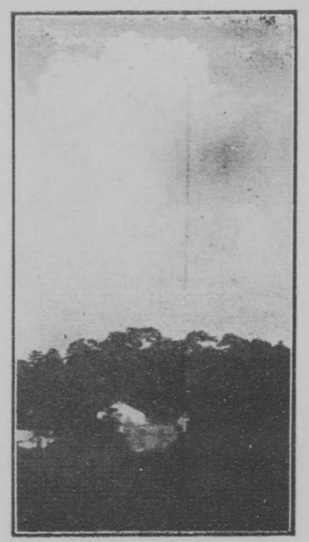
宇野ノ老櫻（友枝驛）

（驛江松）掛腰御

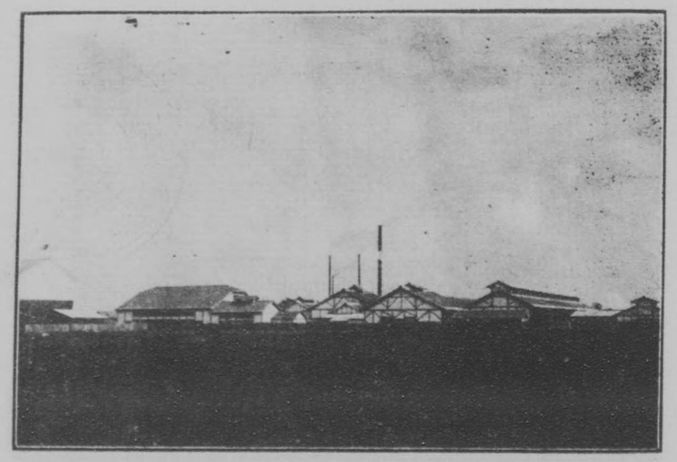
（驛雲安）面側寺林光

（驛雲安）面前寺林光

松みがおノ野拜伏



八屋町ヨリ寶福寺山ヲ望ム



郡是製絲株式會社宇島工場（宇島驛）

393-458

築上史蹟名勝案內目次

名稱	頁	名稱	頁	名稱	頁
築上郡	一	一二、宇島港	一三	一三、宇賀神社	二二
一、椎田町	二	一三、八屋町	一四	一三、吹出の濱	二三
二、網敷天滿宮	二	一三、八尋濱	一四	一四、古表八幡	二四
三、宇留津城趾	三	一四、福岡縣立築上高等女學校	一五	一五、皇后石	二五
四、城井の洞滝	四	一五、寶福寺	一六	一六、天仲寺	二六
五、本庄の大楠	四	一六、菅原神社	一七	一七、廣津城趾	二七
六、天德寺	五	一七、大村城趾	一八	一八、鈴熊寺	二八
七、木の江城趾	六	一八、郡領屋舗	一九	一九、福岡縣立築上中學校	二九
八、松江驛	一一	一九、伏拜野	一九	二〇、旭城趾	三〇
九、御腰掛	一二	二〇、大富神社	二〇	二一、足洗池	三一
一〇、宇島町	一二	二一、勅使井	二一	二二、千束神社	三一

大正 11.11.28 內交

三三、狹間の觀音　三二
三四、如法寺　三三
三五、川底の大楠　三四
三六、耳垂の岩屋　三五
三七、求菩提山　三七
三八、日熊城趾　三九
三九、光林寺　四〇
四〇、矢方池　四一
四一、瓦竈の跡　四一
四二、宇野の老櫻　四二
四三、觀音原　四三
四四、牛頭天王　四五
四五、加能松城趾　四六
四六、松尾山　四八
四七、雁股城趾　四八
四八、唐原の梅林　四九
四九、傾城石　五〇
五〇、弘法窟

二

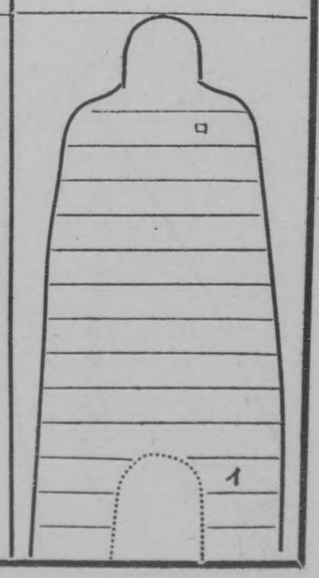
誤		正
祝辭■頁	三行	新○ノ下ニのヲ加フ
仝■頁	五行	有すガ存す
仝■頁	六行	史跡ガ史蹟
五頁	十行	字都宮ガ字都宮
九頁	五行	ば馬ヶ嶽ハは馬ヶ嶽
十一頁	八行	一匊ハ一摘
三十二頁	八行	水を吸ハ水を汲
三十三頁	八行	なりハあり
三十六頁	八行	添島ハ漆島
三十九頁	十行	當がのハ當寺の
四十二頁	三行	逸物ハ遺物
四十七頁	三行	神社ばハ神社は

各商工案内中　やまと屋旅館電話店二十一番トアルハ店主トシ二十一番ハ除ク

友枝ノ瓦竈跡ノ圖

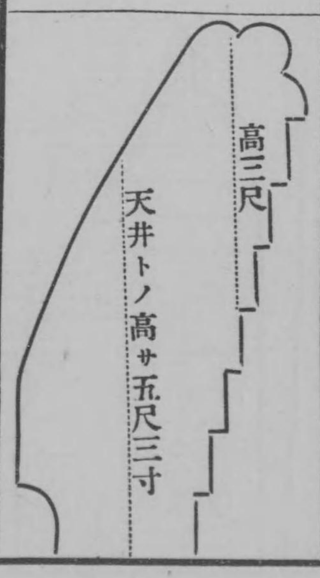
第一圖前面

階段數十四
穴口高四尺巾三尺八寸
イ、位置ニ於ケル空ノ横巾六尺五寸
ロ、位置ニ於ケル穴ノ横巾三尺五寸
奥行六間半



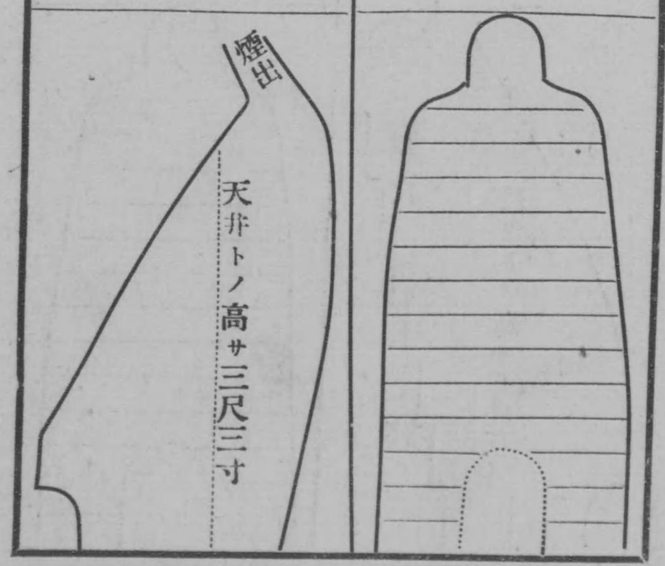
仝横斷面

勾配一間ニ四尺
階段高サ壹尺
階段廣サ壹尺二寸

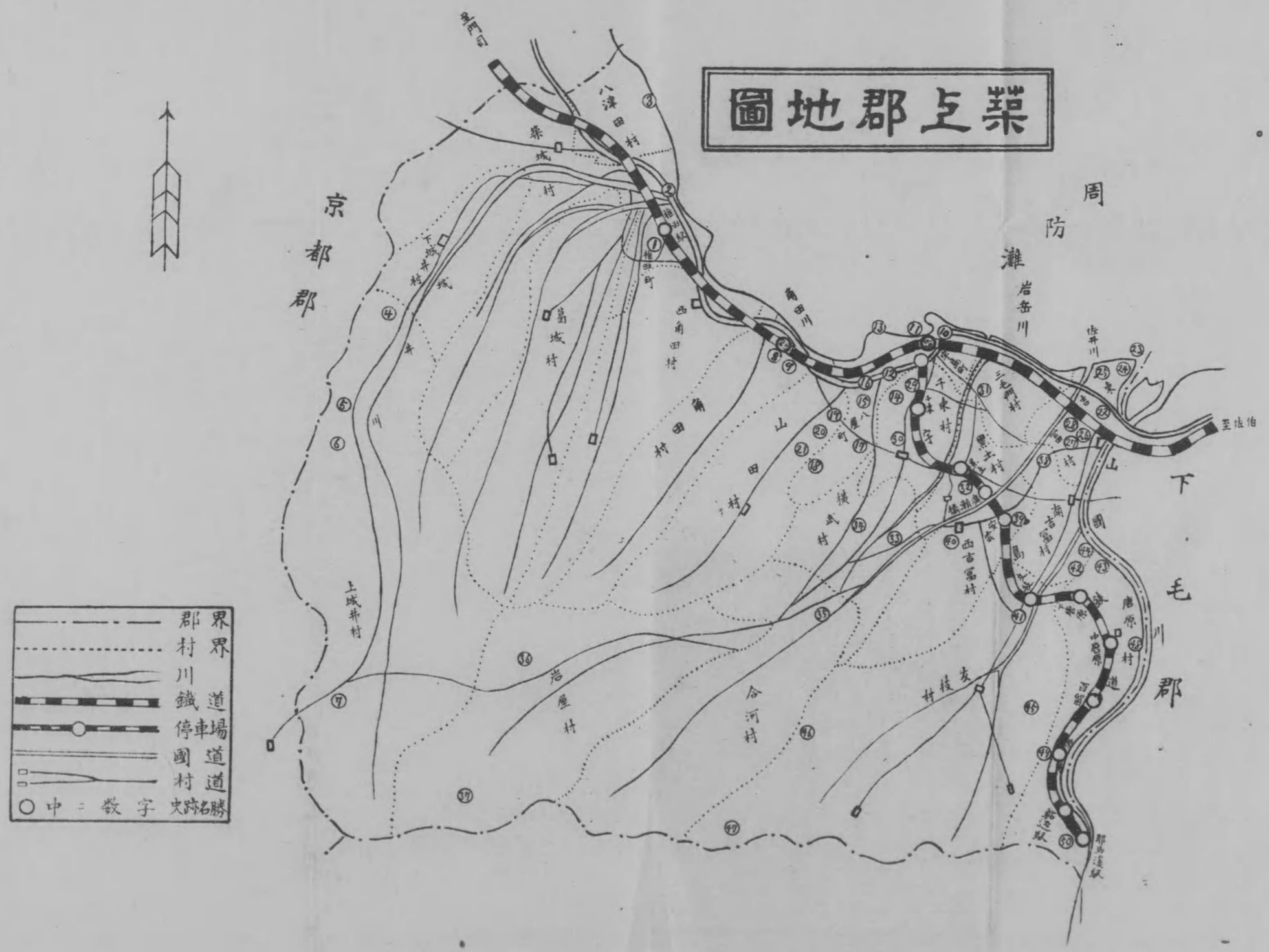


友枝ノ瓦竈跡ノ圖

第二圖前面	仝横斷面
奥行三間半 穴口高サ四尺 穴口巾二尺	穴ノ横巾五尺三寸 勾配一間ニ付四尺



葉上郡地圖


京都郡
周防灘
下毛郡
八津田村
葉城村
下城井村
葛城村
西角田村
角田村
山田村
横武村
岩屋村
合河村
上城井村
岩岳川
角田川
西吉富村
南吉富村
唐原村
中島原
可部
至佐伯
界郡
界村
川
鐵道
停車場
國道
村道
名勝史跡
中ニ數字

序

鎮守の森、產土の社、忘れんとして忘るゝ能はざるものは生れ故郷の愛着なり。こゝに慈親いまし、こゝに祖先ねむり給ふ。これぞ國を念ひ君を慕ふの大精神を涵養する温床なる。鄉里の魚鹽は他鄉の魚鹽よりも甘さを覽え、鄉里の雨風は旅の雨風はぞつらからず。人間到る處に青山ありといふは男子の意氣なれど、然も故山に安らかに眠らんことを希ふの情に英雄ナポレオンに於て明に其實先例を示す。鄉里は家庭、故山は慈母、こゝに生れてこそ人もさきく育ち行き、正しき道をも踏み行くめる。彼の義理を知らず、人情を辨へず、軍旅に在ては命に服せず、社會に出でゝは動もすれば過激極端のふるまひあるもの、其生ひ立ちを精査すれば、流寓多年故山なく鄉里に親まざるものにこれ多きは爭ひがたき事實なり。

武陵桃源の夢は生存競爭場裏には否定せられんも、吾人は終に生存競爭を超越せんことを理想とす。物質のわさましき境地を解脱して、精神の清き樂土に住せんこと、現當二世の願なるべし。小原の里擧つて純忠今に盡らず、新○ほとり時に不逞の出つるを聞く、これをしも觀せずしてあるべき。鄕里の尊さこゝに在り。故山のかしこさこゝに有す。頃者同鄕の士岡、佐知、二君年來業務の餘暇もて討究せる鄕里の山河閭里史實傳說を集めて一冊とし築上史跡名勝案內となす。史乘に乏しく考證に不便なるを兩君の努力終にこゝに至るもの頗る多とすべし。これに依りて爲に埋もれんとする傳說を生かし、これがためまさに絕えんとする史實を明にすること少からず。讀者はたゞに愛鄕の心を養ふのみならんや、これを溫床として、他日國を動かし天地を感ぜしむる誠を發揚する人たることを得るものも多かるへじと思はる。卽ち一言を卷頭に題す。あはれ產土の神もこの眞心こめたる冊子の前途を幸はひ玉へかし

大正十一年初秋

福岡縣立築上高等女學校長　有永眞人

序

築上ノ地北豊ノ中央ニ位シ土地肥沃風光明媚ニシテ山海ノ形勝ヲ占ム是ヲ以テ史蹟名勝ノ世ニ傳フベキモノ尠シトセズ豫テ此方面ノ研究ニ造詣深キ岡南窓佐知英蓉兩氏相謀リ築上郡史蹟名勝案内ヲ編纂セラル其稿ヲ見ルニ用意周到説明親切ニシテ興味津々タリ將來地方ノ敎化ニ資シ殊ニ愛鄕ノ念ヲ涵養スル上ニ於テ裨益スルモノ鮮少ナラサルヲ信ズ

一言所感ヲ述ベテ序言トス

大正十一年初秋　縣立築上中學校長　井上正信

緒言

岡南窓佐知芙蓉兩君茲ニ築上史蹟名勝案内編纂ノ擧アルヲ聞ク惟フニ余未タ其内容ヲ審カニセサレドモ本郡史蹟ノ永遠ノ資料ナリ一ッハ他郷人士來遊好箇案内タルベクンバ世道人心ヲ稗益スル所尠カラザルベシ之カ編纂ニ當リテ一言ノ謝辭ヲ呈ス

大正十一年初秋

築上郡長　宮崎幸十郎

はしがき

由來本郡は地西陲の要衝を占め史蹟名勝の世に傳ふべきものまた少しとせず然りと雖未だ案内記の如きものなく為めに此の地に遊ぶものゝ不便を感ずるや大なり偶々史蹟に臨み名勝を訪ひて如何なる所なるかを問ふも殆んど答へ得るもの少きが如し茲に於て余等は一は史蹟の堙滅を防ぎ一は名勝を世に紹介せんがために郡内を一巡し五十ヶ所を調査してその概要を記述し名づけて築上史蹟名勝案内と言ふ聊かにても讀者をして益する所あらば幸甚と云爾

大正十一年初秋　　編者識

凡例

一、本書ハ築上郡ノ史蹟及名勝ヲ調査シ蒐メシ編纂シタルモノナリ爾來郡内ニ案内記ナルモノナク實ニ不便ヲ感ジ遺憾ナカリシガ茲ニ五拾ケ所ヲ選定シテ其ノ大畧ヲ記述シ著作シタルモノナリ

一、本書ハ郡内ノ西方椎田町ヲ起点トシテ史蹟名勝ノ調査ヲ始メタレバ城井川ヲ逆リ而シテ漸時鐵道沿線ヲ東ニ下リ宇島八屋附近ヲ探リテ山國川附近ニ着シ更ニ宇島驛ニ引返ヘシ社線宇鐵ヲ南進黑土驛ヨリ西南岩岳川ヲ逆リテ安雲ニ引返シ仝鐵沿線ヲ下リ耶馬溪ノ門戸有野ノ名勝弘法窟デ終局ヲ告ゲテ居ル順序ト成ッテ居ル

一、本書ニハ地圖ヲ挿ミ有レバ史蹟名勝ヲ探ルニ便覽トセシメ卽チ目次番號ト○

中ニ番號トヲ引合シテ其位置ヲ知ルニ好都合トナラシメタリ

一、本書ハ郡内ノ鄉土史トシテ其樞要ヲ摘祿シテ著作シタ者ニテ幾分教育資料ノ一助トモナルベケレバ幸甚ナリ

大正十一年初秋

編者識

◉築上郡

豊前六郡の一で、明治二十九年、築城上毛の二郡を合併して本郡が出來た。北から西は京都郡に接し、南から東は大分縣下毛郡に界し、東から北は周防灘に瀕して居る。

面積は十一方里四九。戸數一万一千百九十八。人口五万九千五百二。

地勢は、郡の西南は英彦山の餘脉たる所謂南山が東西に連亘して、求菩提山、犬ケ嶽、經讀岳、雁股山、松尾山等を起し、更に是等の山脚が東北に放射し、數多の溪谷を成し、從つて河川も皆之に沿うて東北に流して周防灘に注いで居る。

海岸一帶は肥沃で、米麥の產額多く、海には魚貝の利が夥しい。

九州鐵道の豊州線及び國道は、此の海岸を西北から東南に奔り、郡内に鐵道驛と

しては、椎田、松江、宇の島の三つがある。

一、椎田町

豐州線行橋驛から東に進むと、椎田驛がある。此處に椎田町があつて、稍々繁華である。上古難波から九州に渡るには先づ此處に上陸し、それから七曲越を經て大宰府に往つたもので、菅公左遷の時も之から上陸した。今に湊と言ふ所のあるのは是がためである、人口三千三百七十二。綱敷天滿宮、郡立實業女學校等がある。

二、綱敷天滿宮

椎田町の海濱、風光明媚の所にあつて、菅原道眞を祀り一に濱宮と言つて居る。口碑に、第六十代醍醐天皇の御世、菅公が藤原時平の讒言によつて、筑紫に左遷

せられた際、其の乘船が暴風のために此の海邊に漂著した。時に此の濱に干見と言つて箕の手に石を組立て、汐干を待つて漁を業とするものがあつて、公を助け奉り、海邊に船綱を敷いて種々勞つた。後神託により社殿を建てゝ公を祀つたのが、此の宮の起原であると傳へて居る。社格は鄕社である。

三、宇留津城趾

八津田村大字宇留津にある。椎田驛の西北方十四五町。此の城には城井の宇都宮氏の旗本加來新外記が居り、其の子、孫兵衞元國に至り、島津義久に味方したため、豐臣秀吉島津征伐の際、其の先鋒小早川隆景、吉川元長、監軍黑田孝高等の攻むる所となり、天正十四年十一月七日落城した。豐前で第一に豐公の兵を蒙つた城として有名である。

四、城井の洞庵

椎田驛から西北約三里、上城井村大字眞行寺にある。丘陵中に隧道(トンネル)を穿ち、中に佛像を數多安置してある。是は本庄の醫師内野東庵と言ふ人、當地に經營したものので、近時の開基ではあるが非常に趣味がある。又城井谷否築上郡の一名所として耻かしくない。東庵此の洞を作つてより洞庵と改名して現に此處に住んで居る。

五、本庄の大楠

椎田驛から西南三里十五町、上城井村大字本庄にある。日本でも有數な古木で根際の周り十六間計り、中は空洞になつて居る。

十二代景行天皇十二年、熊襲御親征の際、京都郡長峽縣(ナガオノアガタ)に行宮をお建てになり、此の邊に樓んで居た土蜘蛛御退治の御祈の時、植ゑさせ給うたものであると傳へて居る。

四十八代稱德天皇の御宇、宇佐神宮一の御殿造營の際、此の木の下で柚始の式が行はれ、後同殿御造營の際には必ず柚始の式は此の木の下で行はれるのが例であつたと言ふ。

明治三十四年十二月二十日夜、此の木の空洞に入つて火を焚いた者があつて、其の不始末から火が内部に燃えつき、南の一の枝が僅かに殘つたが又芽をふいて盛に繁つて居る。

六、天德寺

椎田驛から西南三里半、上城井村大字本庄にある。今は曹洞宗の禪寺で、貞和年間、宇都宮頼房の創立、開山は藏山融澤である。城井字都宮氏の菩提所で代々の

墓碑を存し、又寺の南に高き所に同氏の邸宅の趾と言ふのがある。

寺寶の三足墓の香爐は、後冷泉天皇の御代安倍貞任宗任反逆の際、宇都宮氏の祖宗圓が賊徒調伏の祈禱をして効があつたので、同天皇から賜はつた物であると傳へて居る。

七、木ノ江城趾

椎田驛の西南五里、上城井村大字寒田にある。此の城は豊前の豪族宇都宮氏十八代四百年間の居城で、豊前史に最も關係深きものである。

宇都宮氏は本姓藤原、其の祖遠く粟田關白道兼より出て居る。道兼五世の孫信房、源頼朝に從ひ、平家の殘黨を鎭定するに功があつたので、文治元年九月五日、八十二代後鳥羽天皇から、豊前の國内で九千七百二十餘町歩を賜はり、次て建久六

年五月十六日、源頼朝より豊前の守護職に補せられ、寒田の木ノ江城に居つた。之が豊前宇都宮氏の祖である。其の後冬綱又足利尊氏に味方して再び豊前守護職となり、十八代の主鎭房に至り、中津城主黑田孝高（如水）のために亡ぼされた。

天正十五年豊公の島津征伐があつた。其の時鎭房は病氣で往く事が出來なかつたから、長子朝房をして代つて從軍せしめた。島津氏平ぎ豊公大宰府にかへつて論功行賞に及んだ際、豊前國企救、田川の二縣を毛利勝信に、京都、仲津、築城、上毛、下毛、宇佐の六郡を黑田孝高に與へ、宇都宮朝房をば伊豫十二万石に封じた。鎭房言ふには、豊前は始祖信房後鳥羽院より賜はりしよりこゝに四百年、我祖先憤墓の地である。去るに忍びない。伊豫は我が望む所でないと。朝房止むを得ず印書を秀吉に返した。秀吉大に怒り更に封ずる所なく其まゝ皈洛した。鎭房

父子力を失ひ善後策を毛利勝信に謀つた。勝信は之を憐み、自分の領地内田川郡白土、櫟原、成光三村を給して此處に居らせた。かくて居ること數月同年十月に至り、朝房が父に向つて言ふには、吾等碌々此の地に幽居したならば、遂には毛利氏の旗下となつてしまふでわらう(勇士徒らに草木と共に朽ちるに忍びないと、鎮房も之を然りとなし、籠城しやうと城井の古城に向ひ、黑田氏の守將大村助右衞門を逐ひ、守備を修めて守り、旗下の族臣十餘人之に應じ、斷然黑田と絶つた。中津にては唯事ならずと其の旨を大閤に報じて方略を請うた。秀吉は毛利輝元に命じて黑田を援けて城井を攻めさせた。十一月孝高は毛利の援兵を併せ二万騎、長子長政を將として城井に向はせた。大野正重先鋒となり、毛利方の援將勝間田彥六左衞門の兵之につぎ、岩丸山に陣して挑戰した。朝房は兼て思ひ設けし事と

て、少しも驚かず、豫め兵を谿中に伏せ、長政の全軍山に登るに及び、俄かに起つて之を討つた。黑田方は不意を討たれたのと、地理に暗いのとで、奮戰大に力めたが遂に敗れ、大野は鹽田内記に、勝間田は新貝荒四郎に討たれ、長政は五十騎と馬ヶ嶽に遁れた。そして馬ヶ嶽に達する頃には主從僅かに九騎、城井の群臣ば馬ヶ嶽を襲ひ、長政を討取らうとしたが、鎮房許さずして言ふやう、我黑田に怨はない。唯城を守りて公命を俟つのみと。長政身を以つて中津に歸り、且つ慙ぢ且つ憤つて曰ふには、吾再び弓矢を手にしないと。將に髻を斬らうとした、父孝高呵々笑つて曰ふやう、凡武將の敵に克つの法三つある。一武勇を以つて制す。二和親を結びて欺く。三金玉を以つて矯らす。一旦の勝敗は意とするに足らない。吾第二の謀を以つて是を滅ぼす三年は出でまいと。是から密謀を秀吉と議し、陽

に和親を結び、翌天正十六年、鎭房の女千代姫を長政に貰ひ受け僞印書を秀吉から申し下し、封邑もとの如くし、然して城井の君臣を安堵せしめた。之より黑田は上毛、下毛、宇佐等の諸城を攻め亡ぼして城井の羽翼をそぎ、然る後に城井にかゝつた。之より先長政は先つ城井に赴きて婚姻の禮を修め、且つ贈るに金帛を以ってし、使者の往來繁く全く世は大平のやうてあつたが、之は陽の事て陰には實に懼るべき密謀があつたのである。

黑田孝高は宇都宮父子を中津に招き寄せて之を討取らうとし、日を尅して來津を約した。一方秀吉は朝房をして肥後に赴き佐々氏の後事を治めさせた。鎭房中津に答ふるに朝房が肥後から皈つた後に、御城に罷り出やうと言ふ事にした。孝高は事情を述べて期の延す可らざるを以つてし之を强ひた。城井の君臣議決せず。

老臣芳賀四郎右衞門等兩主同時に城を出つるの不可を論じたが、鎭房遂に決心し、後事を老臣に委ね、天正十七年四月二十日、父子裡を分つて兩城に向つた。是の日孝高は豫め勇士を帳中に伏せ、宴半にして信号を以つてした。勇士踊り出て鎭房に斬りかゝる、鎭房天を仰いで悲噴の涙に咽んだが從兵なく如何ともする事が出來ず、遂に中津城内の露と消えた。

朝房も肥後に逐り二十三日木葉驛にて加藤清正の伏兵のために討され、十八代四百年連綿たる宇都宮氏も遂に滅んでしまつた。あゝ宇都宮氏の末路については誰か一掬の涙をそゝがぬものがあらう、

八、松　江　驛

椎田驛の東に松江驛がある。此の間一里一町、角田村の大字で、小市街の形をな

して居る。此の浦の鱸は美味と言ふ事で名高い。附近にお腰掛の舊蹟がある。

九、御腰掛

松江驛の東南近くにある。國道に沿ひ、壇を築いて休憩所としてある。古松枝を交へ、八屋明神ヶ鼻を入江を隔てゝ東に望み、北には中國の山巒が見え風景絶佳である。之から舟入まで道の一方海に臨める方に松並木がある。此の休憩所を俗にお腰掛と言ひ、宇佐への勅使が此の處にて休憩するため設けたものであるといふ。又領主代替りの際領地を巡つて居たが其の時も休憩しだとの事である。

一〇、宇島町

松江驛から東に進めば宇島驛がある。宇島町は其の東に位し、宇ノ島港は驛のすぐ北に見える。八屋へ十五町、大分縣界へ一里十九町。人口三千七百一、此の町

は小倉侯文政中此處に築港をなした際、小祝と高濱との漁民三百餘戸を移して出來た町で小繁華の地である。

一一、宇島港

宇ノ島驛から眸を北に轉ずれば、珊瑚礁の如き防波堤がわつて、帆檣林立して居る。是が有名な宇島港である。此の地はもと、赤熊の地先濱で、小松生ひ荆茂つて、鵜ノ島が群居し翼を干して居た。依つて俗に鵜ノ州と言つて居たのである。然るに文政の初、領主小笠原侯が築港を始め、其の五年に小祝、高濱の民家三百を移して市街を作つた。此の時鵜ノ州(シマ)を改めて宇ノ島と更めた。築港は文政四年四月工を起し、同十一年正月功を竣へた事が築港紀念碑及び豐前國志に見えて居る。

夜從二鵜島一抵二下關一舟中　　梁川星巖

萍跡不定任浮浪　　又把全家付葦航
二岡七灣何處所　　漁燈鬼火夜茫々

一二、八屋町

宇島驛から西近くにある。郡内第一の繁華な地で、人口四千六百三十一、築上郡役所、警察署、郵便局、福岡縣立築上高等女學校、郡立實業學校、等があり、又八尋濱、寶福寺、菅原神社等もある。松江まで三十二町、福岡市まで三十一里十六町を隔てゝ居る。

一三、八尋濱

和爾雅に「豊前八尋濱あり、國人のいふ八尋濱は上毛郡蜂屋のわたりを云ふ」とある。卽ち八屋町の海岸一帶の稱で、松風濤聲相和する所を明神ヶ鼻と稱へ、此處に嚴島明神の祠がある。鳥居のあるわたりから、松江の海岸を眺めた景色は實に名狀が出來ない。古くから名の知れた所で、一に八劒濱と言ひ、大富神社の祭禮には、神輿の御幸があつて賑ふのが例となつて居る。

八尋濱　　大式高遠

春の日の遙に道の見えつるは
八尋の濱を行けばなりけり（夫木）

一四、福岡縣立築上高等女學校

宇島驛から數町西、八屋町の内にある。當校は大正五年、山口築上郡長、神崎福

岡縣會議長及び郡會幹部諸氏が相謀り、もとあつた郡立八屋實業女學校を廢し、之に代ふるに郡立高等女學校新設の案を作製し、郡會の協賛を經、翌六年四月認可を得て開校した。

當時校舍は、郡立農學校の一半を用ひたが、同年十二月、農學校を他に移轉したので、校舍全部使用することゝなり、翌七年四月から校地の擴張、寄宿舍の移轉、教室の增築改修等を行ひ、かくて大正九年四月には愈々縣營となつた。創立は大正六年四月十六日、校長は本郡の出身、有永眞人氏で、創立の際から百方盡力して今日の隆盛を來たして居る。

一五、寶福寺

八屋町寶福寺山にある。黃蘗宗、企救郡足立廣壽山福聚寺末。本尊藥師如來。之

は行基の作と傳へて居る。往古は法相宗で觀音菩薩を本尊とし、多くの堂塔を有して可なりの大寺であつたが、應永年間大內大友兩氏の亂の時兵火に罹り一時荒廢して居たのを延寶八年宇佐郡の雲雪禪師が來て再興し足立山福聚寺末となつた。

一六、菅原神社

八屋町寶福寺山にあり菅公外六柱の神を祀つてある。當社地は往古の寶福寺地である。八屋村人寬永十二年頃より八屋鎭守の神を祀らうとの議起り、慶安元年六月山田別殿の宇都宮神を祀らうとの議まとまり、明暦三年八月神殿を營んだ。然るに山田の氏子八屋の守神宇都宮神を八屋に移すときは八屋の氏子は山田社から退き山田社衰微に至るとの事で中止となり、其の後早魃があつたので雨請の神とし

て天滿宮を祀らうと寛文十二年七月十四日大宰府から天滿宮を勸請した　延寶八年の冬寶福寺が再興せらるゝに及び同寺の鎭守の神としたが維新の際全く分離してしまつた。

一七、大村城趾

宇島驛より西十町餘、八屋町大字大村にある。當城は、山名相撲守、征西將軍懷良親王に從うて下りこゝに築いたに始まり其の子武藏守を經相撲守氏政に至り應永六年より大内盛見の軍役に服した。後山田氏の抱城となり天正十五年山田親實、此の城に據つて黑田氏に抗し城陷つて木江城に奔つた。宇都宮、黑田兩氏和議に及び親實は再び當城に入つたが、天正十六年九月九日、黑田孝高は親實を中津に招き、窃に城裡に殺し山田の宇都宮氏全く亡んだ。

一八、郡領屋輔

八屋町大字大村の鈴木谷にある。聖武天皇の天平十二年、藤原廣嗣の筑紫に據つて叛した時、上毛郡の擬大領紀宇麿と言ふが官軍に降つたと言ふ事が續記にある。其の擬大領の居つた所だと言ふ。大富神社の由緒書にも「炊江の古跡鈴川なり、此川の東のかたに紀宇麿の屋しき趾あり鈴木山鈴木谷と云ふ云々」と見えて居る。

一九、伏拜野

大富神社の北八町位にある。人皇四十八代稱德天皇の神護景雲三年和氣清麿、宇佐宮に神勅を承りに參つた時、行路から大富社を拜したより起つた名で、今此處に老松が一本あり俗に拜松と言つて居る。下に紀念碑が建てゝあり「和氣公拜社舊跡、川内、谷慶藏建之」と刻してある。

二〇、大富神社

宇島驛から西南約半里、縣社で山田村大字四郎丸にある。祭神は十柱、中殿は住吉三神、右殿は八幡宮で、應神天皇、仲哀天皇、神功皇后、左殿は宗像の三女神、其の他に齋主神武甕槌を祀つてある

大富神とは住吉宮を言つた事は、豐前誌に「抑々當社御鎭座の始は不詳、社記云、成務天皇戊寅八年五月、大富社に虫災を祈りて印有、又仲哀天皇戊戌三年同社に雨を祈るとも見え、大富社は甚も古く起りたる事に覺ゆ云々」

八幡神を祀つた年代は又同書に「天武天皇之白鳳元壬申年八幡大神を九月十日奉迎而御中殿に鎭祭あり」と見え

宗像宮については又同書に「宗像之神御鎭座者不詳」

代々神殿守護山田氏、大宮司清原氏、長谷川氏、次官清原氏、

毎年八尋濱に祭禮がある。此の事も豐前國志に「毎年八劒の濱にて祭禮あり、六月十九日御拔の日右家々の子孫多く殘りて神輿に供奉す、此の內一人色替りを着す、外は都て烏帽子白衣を着す、此の夏越の神幸に豐前樂を奏す、此の日祭式尤嚴重也、遠近より見物人群集せるを思ひ繼きてかくは。

大富の神にしませは豐國の　　吉近

後の榮をなほも祈らむ

二一、勅使井

大富神社の境內にある。社記に「宇佐宮勅使當社に入たまふとき、此井の水を奉りし古例により、今猶宇佐宮勅使度ごとに、八屋驛御旅館御茶の水は此井より奉

事は去る元治元年甲子度も國君より仰せられける。神主山田氏清秡して奉ける乞
尊くも灼然たる事どもなり」と見えて居る。紀念碑が建てゝあり「勅使井舊跡、
川内、谷慶藏建之」との銘がある。

二二、宇賀神社

古表社の西南山國橋近くにある。祭神は城井宇都宮鎭房の女千代姫と言ふ事にな
つて居る。其の由來はと聞けば、今は昔三百年前、黑田孝高（如水）城井の宇都
宮氏を亡ぼすために、鎭房の女千代姫を子息長政に貰ひ受けて陽に和親を結び、
天正十七年四月二十日、鎭房を中津城に招いて、宴席に不意打をし千代姫は此所
で磔にかけたと言ふ事である。後元祿十五年四月此の塚から兩足の蛇が這出たの
で役人共打殺し、時の中津城主小笠原長圓が、參勤のため江戸に到つて居つたの

に送つた所、長圓一覽の後心地唯ならず、遂精神に異狀を來たし。自分は城井の
娘である、とがのないのに殺され、今に怨ははれぬ云々」とのゝしるので、此所
に祠を建て、宇賀神と稱して其の靈を祀つたのが此の社の起原であると傳へて居
る。一木の老松があつて天正の昔を物語つて居たが、大正八年五月二十六日午後
二時頃風なきに根際から折れて東に倒れてしまつた。

二三、吹出の濱

山國川口左岸から北の海岸にかけての稱で、一名高濱とも言ひ、古來千鳥の名所
として世に知られて居る。枝ぶり面白い磯馴松のあたりから、豊後の姫嶋を雲烟
模糊の間に眺めた景色はほんとに好い。こんもりと茂つた杜の中には縣社古表神
社かあつて參詣人が多い。

秋風の吹出の濱の濱姫は　平　祐　擧

夜寒になれや衣かたしく　（夫　木）

鷹　司　院　司

秋の夜はさぞ寒からし浦風の

吹出の濱の千鳥なくなり　（夫　木）

日　野　大　納　言　資　枝

追風や吹出の濱の朝ぼらけ

とまりをいづる千船百船

加　藤　千　蔭

夕汐も今やみつらん時津風

吹出の濱の千鳥なくなり

二四、古表八幡

縣社で、吹出濱の古表の杜にある。祭神は神功皇后と其の妹虚空津比賣命の二柱で、人皇二十九代欽明天皇の六年秋、玉手翁神誥を蒙つて奉祀した古社である。人皇四十四代天（てん）正天皇の養老三年、大隅日向の隼人の叛いた時、豐前の國司宇努首男人、此の宮の神主重人と宇佐古表二所の神輿を奉じて、之が征伐に行き、賊に油斷させるために戰場に伎樂を奏し、急に伐つて是を平定した。依つて宇佐八幡の託宣により、人皇四十五代聖武天皇の天平十六年、始めて放生會を行つた際、古の形を表した木像を作り、船に乗せ、廣津崎から八月十三日、宇佐郡和間の浮殿

に行き、宇佐八幡の出御を待つて伶人等伎樂を奏し、隼人を討つた時の形態を表した。依つて古表大明神と稱するに至つたとの事である。今こゝにある騎牛女神の像は國寶となつて居る。

二五、皇　后　石

古表社の西數町にある。古代神功皇后此の石の上に顯れ給ふた。依つて人皇二十九代欽明天皇の六年、玉手翁が神詰によつて吹出の濱に齋き祀つたと言ひ、或は皇后新羅征伐の際、宇佐郡船木山の木を伐り、船四十八艘を造つて此の石に繫き給うたとも傳へて居る。石の周圍一丈五尺高さ四尺許りで、中から割れて臼の形をなして居る。依て俗に鬼の臼とも言つて居る。

二六、天　仲　寺

中津驛より西數町、東吉富村大字廣津にある。曹洞宗の禪寺で、中津城主小笠原長次、同長圓の墓がある。又此の山は中世廣津山と言ひ廣津城は此處にあつたのである。山の形から一名臥牛山と言ひ寺は其の頭部に當る。櫻があり、藤があつて中津市街を眼下に見下し、花時には遊覽の客が多い。

山　藤　　渡邊重石丸

紫の雲は年ふる庭に來て
松の木末の藤に見るかな

二七、廣・津　城　趾

東吉富村大字廣津の天仲寺山が之である。當城は朱雀天皇の天慶中前伊豫椽藤原純友が亂を起して九州に渡つた際追討使小野好古の副將源經基が築き其の家臣源

行家を置いたに始まり行家の後家貞、行幸、貞胤相次ぎ貞繼に至り文治元年六月宇都宮信房に亡ぼされた。信房は之を亡ぼし第六弟出羽守直房を當城に置いた。直房は廣津氏と稱し子孫代々居り天正に至り中津城主黑田孝高に降つてこゝに廣津城はなくなつた。

二八、鈴熊寺

中津驛から西十町餘、東吉富村大字鈴熊の小丘上にある。人皇四十五代聖武天皇の天平六年、此のわたりに疫病が流行した際、行基、天皇の詔を奉じて此の地に來たり、一刀三禮以つて藥師如來を作り、除病の法を修して効驗があつた。依つて天皇は此の寺を勅願所とせられた。下つて天正中大友の兵火に罹り、寺觀堂塔悉く烏有に帰し、本尊の行方不明であつたが、元和の頃隣村別府の田中から發見

した。今は國寶として有名である。寺は新言古義派で、高野山の直末となつて居る。

二九、福岡縣立築上中學校

宇の島鐵道千束驛附近にある。大正六年、山口郡長八神崎縣會議長其の他郡内の官民有志協力して縣立中學校設立の議を企て、縣當局及び縣民に向つて要望する所かあつた。時に下城井村藏内保房氏は進んで創立費中に十一万圓の資を提供し郡民亦一万坪の敷地を寄附することゝし、縣當局の入るゝ所となり、同年の通常縣會に於て縣立中學の新設を決議した。創立年月日、大正七年三月八日。校長井上正信氏で理學に造詣深く、創立以來郡の男子教育につくされ校運日に隆盛を極め、父兄の信頼も亦篤い。

三〇、旭　城　趾

千束驛の南近き所にあり、小笠原氏の宅地である。千束小笠原氏は小倉小笠原家の祖忠眞の四男眞方が、寛文十一年築城墾田（松江の天神原邊）一万石を賜はり、篠崎といふ今の小倉練兵場内に屋敷を構えて居たのに始まつて居る。然るに貞享元年上毛郡内黒土、岸井の二手永合せて二十六ヶ村一万石と更へた。慶應二年幕府長州再征の時、長州兵小倉に攻めて來たので、八月一日小宮某火を城に放ち小倉、篠崎の二ヶ所共に燒け、兩主一時肥後に遁れ、篠崎侯は一時山鹿に滯在し、間もなく田川郡香春に移り、十一月一日近江寺眞直侯上毛郡に入り、千東原に築城を始め、明治二年十一月頃竣功し旭城と稱して是に移つた。之が千束に小笠原家のある始で、間もなく廢藩置縣となつて破却し今は只石垣のみ殘つて居る。

三一、足　洗　池

宇島驛より南約二十町、三毛門村大字清水町にある。和氣清麿が奸僧道鏡の怒にふれて大隅國に配流された時、今の清水町に休憩した。土人清麿の疾あるを憫み、此の處にある泉はよく諸病に驗があると告げた所、清麿足を洗ひ忽ち効驗があつた。是から足洗池と名つけ今に足痛のものは此の泉に足をしたせば驗があると言ふ。或は神誥を受けに往つた時の事ではあるまいか。

三二、千　束　神　社

宇島鐵道黒土驛から西一二町、黒土村大字久路土にある、境内に清水が湧出するので一に石清水八幡と言ふ。清和天皇の貞觀三年三月十八日夜、和氣清足、神誥に依つて村人と祀つたのが當社の起原である。正親町天皇の永錄五年豊後の大友

の家臣田原紹忍門司城主仁保衞門就定を攻めた時、此の宮は燒却された。明治四年千束神社と改稱し今は鄉社となつて居る。

清　水　宮　　大　江　匡　房

はさばやなしのをりかけてほす衣

清水の宮の流絶えせで　（夫　木）

三三、狹間の觀音

宇の島鐵道黑土驛の南方約一里。橫武村大字狹間にあるく俗に乳の觀音と言つて、豐前三十三ヶ所觀音の一所となつて居る。岩下に堂があつて、岩から垂る水を吸んで來て粥を焚いて食へば、乳の出ない婦人に乳汁が出るといつて參詣人が多い。彫刻古く且つ優秀と言ふ廉で國寶となつて居る。今は小堂に過ぎないが昔は可な

りの寺院であつたやうに思はれる。此の寺昔藥師寺東光庵の末院であつたとか、如法寺の子院であつたとか言はれて居るが確証を得ぬ。松尾山中ノ坊奮記に「狹間岩屋、岩屋山、泉水寺、當山中尾坊輪應院開」とあるに依つて見れば松尾山に何たか緣のあるやうである。

三四、如　法　寺

宇ノ島驛より西南方約二里半、橫武村大字山內にある。黃蘗宗の禪寺で、本尊は觀世音菩薩、豐前國三十三所觀音の一所となつて居る。寺記に行基菩薩の開基となり、宇都宮家譜には「文治年大和守信房建立、座主少僧正生西信房三男也」とある。思ふに行基開基し信房中興したのではあるまいか。境內に信房盛綱の墓と言ふかあり、又有名な仁王の像が山門の左右に安置してある。里人言ふ、其の股

をくぐれば天然痘を病まぬと。

三五、川底の大楠

狹間の觀音から南數町。合河村大字下川底にある。應永二十七年八月二十五日、宇佐宮二の御殿造營の時、柚始式を此の木の下て行ひ引きつゞき造營ある度毎に此所で行はれたと言ふ。

宇佐宮寺造營日記に「應永廿七年八月二十五日壬戌日申刻二殿柚始在レ之、豐前國上毛郡畠河内、一瀨坂、山道列之大楠也、御殿已下儀式並役人等一殿ニ同ジ」と見えて居る。

三六、耳垂の岩屋

宇の島驛の西南三里餘、岩屋村大字岩屋にある。景行紀十二年の條に耳垂と言ふ

賊が御木川上に居つて皇軍に平定せられた事が見え、兩豐記に「耳垂と云賊の住し處は求菩提山の麓犬ヶ窟と云ふ所なり云々」とか、山田宗像社の縁起中に「景行天皇云々干時爲ニ征ニ伐岩屋之土蜘蛛ニ勅令レ祈ニ神宮ニ云々」など見えて居る。

此の御木川とは、今の佐井川で耳垂の居つたと言ふのは岩嶽川の上流に當るが、岩嶽川も佐井川の一水源をなして居るから御木川上と言つて差支はない。次に土蜘蛛とは土籠の轉訛で穴居したからの稱である、所が近來之はアイヌ語のトンチカムイの約語で之は土中の人と言ふ意味だと說く人もあるが如何であらう。

三七、求菩提山

宇島驛から西南方五里、岩屋村大字鳥井畑にある。元は火山で常に烟を吐いて雲がかゝつたやうであつたから雲出山と言つて居たさうである。今も權現の左側の

岩石の間に辰の口と言ふがあつて、冬になると水蒸氣の立昇るのがよくわかる。山上の神社を國玉神社と言ひ、鄉社で普通には求菩提山權現と言ふ。祭神は歳地主顯國魂神（大己貴命）伊弉諾命、伊弉冉命となつて居る。

往古は兩部神道で、社号を求菩提山權現、寺号を求菩提山護國寺と言ひ、其開基は豐前國志に「求菩提山護國寺は繼体帝の朝猛覺仙人開基云々」と見える。

初雲出山と言つて居たのを後に佛語の求菩提と云ふ語を當てた。

養老の頃には釋行善が居り、保延の頃には釋賴巖と言ふ僧が居た。此の賴巖と言ふ人は添島赤蜂三代の孫に當る人で、宇佐郡木の内妙樂寺に人となり、豐前に來て、當山を中興した。此の時、鑄工に命じて作らせた法華經銅板は今國寶に指定されて居る。

准三后道與法親王

われもまた衆生のために分入れば
上求菩提と名のる山かな

權現の末社に鬼神社と言ふがある。祭神は明かでない。古緣起に「人皇二十七代繼体天皇二十年狗嶽鬼神有レ惱二人民一開基卜仙以二法力一降二伏之一封レ甕埋二於嶺上一爾後祭二其靈一」と見え、筑後風土記筑後國君磐井の反の所に「官軍動發欲レ襲レ之之間知二努不レ勝獨自遁二于豐前國上膳縣一終二于南山峻嶺之曲一、於レ之官軍追尋失レ蹤」とある。是等を總合して見れば鬼神社とは磐井の靈を祀つたものではあるまいか。

三八、日熊城趾

宇の島鐵道廣瀬橋驛から東北數町、西吉富村と南吉富村との界に小丘が二つ列んて居る。其の西の方を日熊山と言ひ、丘上に城趾かゐる。日隈氏代々の居城趾である。

天正十五年、豊大閤の島津征伐の時、黑田孝高功に依つて、豊前國京都、仲津、築城、上毛、下毛、宇佐の六郡を受けて中津城に居り、翌年正月、城の修築を始めた。此の時築城郡に宇都宮氏が居つて黑田氏に降らず、他の小城主も之に應じて居た。黑田氏は之等の小城主に築城の夫役を課したが中々命に從はない。そこで孝高は先づ近邊の城から順次に平定しようと子長政を將とし、後藤又兵衞基次等を副とし步騎三千餘をして日隈城に逼らせた。城主日隈小次郎直次は豫め其の報を耳にし、老將小栗、村岡等をして城外に防がせた。豫て援を求めてあつた川

底城主城井知房は自ら六百騎を率る、山内城主如法寺久明、下川底城主小畑長重は田中委女、奥村勘解由に各二百騎を率ゐさせて援けに來た、然るに黑田氏の兵强く、知房は戰死し味方は敗れて支ふることが出來ないので、直次は城を燒き火中に自殺して城は全く陷つた。時は天正十六年三月五日の事である。

三九、光　林　寺

宇島鐵道安雲驛から東南五町、西吉富村大字安雲にある、此の寺の開基は文明年中で、源平時代其の名のかくれない豊後の豪族大神姓緒方三郎維義の裔、緒方右京大夫義紹と言ふ者、此の地方に住して居たが、豊後國專想寺を開いた天然師の勸めに從つて眞宗で皈依し、その東道で蓮如上人に渴する事が出來、上人の親筆其の他數品を戴き、名を敬昌と改め、安雲に一寺を創立した、是が當がの濫觴で

ある。

四〇、矢方池

築上郡第一の大池で、西吉富村大字矢方にある。宇島鐵道廣瀬橋驛から南五六町に當る。三つの池からなり、水面反別合計七町五反八畝十九歩、西吉富、南吉富、東吉富、黒土、三毛門の五村二十八大字の六百十六町八反一畝二十五歩に灌漑して居る。本事業は初久路土の高橋庄藏氏が起工を思立ち、組合會を組織し、明治二十年十一月十九日、時の上毛郡長清水可正氏を議長に推し、組合會規則を議決し、翌二十一年十月十九日郡長葉山荒太郎氏の認可に首まり、以來本組合の事業管理を郡長に委囑し、葉山氏以下長野恰、村岡益章の二郡長を經高橋永種氏の時に及び明治三十三年五月二十二日竣工し、實に十三の星霜を閲して居る。

四一、瓦窯の跡

友枝驛の西方數町、雁股山の支脉が北に走つて平地につきる所の東面にある。山麓を利用して堀拔き、急斜面の階段十四を有し、上部をア一チ形にしてある。先年内務省の柴田考査官が見えられ、布目瓦の紋樣其の他について調査した結果、是は奈良時代の瓦窯の跡であると言ふ事が知れた。尚此の附近に其の跡と認むべきものが三個所ある、燒灰の破片や齋瓮(イハヒベ)と言ふ古代陶器の破片などが散亂して居る、珍しい遺跡だと言ふ事から、近く古跡保有地としての指定があるやに聞く。考古學に趣味を持たれる方の一度は必ず杖を曳くべき所だと思ふ。

四二、宇野の老櫻

友枝驛の東北數町。南吉富村大字宇野、磯貝宅地内、古墳の上にある。大小二肢

に別れ其の大肢は周圍九尺五寸、小肢の方は八尺で九州第一の老櫻である。此の邊はもと松原で古墳が非常に多く、俗に宇野塚と言ひ、數多き例に引かれて居た。今は開墾して殆んどつきてしまつた。發掘の際、古代の逸物が澤山出た。考古學者は見逃す事の出來ない地である。此の磯貝氏は赤穗四十七士の一人磯貝十郎左衞門の名跡をついだ後裔であり、其の邸にかゝる名木の櫻のあるのは實にふさはしい事ではないか。

四三、觀　音　原

宇島鐵道友枝驛から東北數町にある原野で、今は桑野原と稱へ、面積五十餘町、上代の墓原である。天正十六年三月、黑田氏の日隈城を攻めた時、鬼木惟宗、山田輝家、同親實、八屋刑部、內尾兼元、友枝大膳、緒方帶刀、同刑部、田中采女

等、上毛郡の將士多く直次と合して長政に抗し、兩軍大に此の處に戰つた。而し日隈方敗れ、鬼木惟宗は戰死し、他は居城に逃げ皈つたと言ふ有名な古戰場である。

四四、牛　頭　天　王

宇島鐵道友枝驛から東北約十町。南吉富村大字垂水字向に鎭座する鄕社で。素盞嗚尊及び其の妃稻田姫の二柱を祀つて居る。由來はと調べて見れば、人皇四十四代元正天皇の養老年間、播磨の明石から勸請したとの事である。

山城名勝志に「諸社根元記云、託宣云我天竺祇園精舍守護神云々故云祇園社」と言ひ牛頭天王はかやうな事から一に祇園ともいふ。我が素盞嗚尊は新羅に渡りソシモリの地に居た。ソシモリはソイモリで韓語ソイモリは牛頭の意である。依つ

て素盞嗚尊と印度の牛頭天王とは同体として素尊を牛頭天王と言つて祀つて居る維新の際八坂神社と改稱した。之も祇園社の本は明石から轉々移つて山城の八坂の地にあるからである。

豐前志に「牛頭天王宮、垂水村にあり、六月七八日祭禮なり、八日夜明より近里の人々參詣して里人の苦木(ベラ)の枝を賣るを買ひ持ち皈りて門の戸に挿すなり、然すれば必ず疫癘の災を避くと云ひ傳ふ」とかいてある。之牛頭天王を一に除病の神とするからである。

この丘は山國川の左岸にあつて下毛平野を眼下に眺むることが出來る。大正九年十一月八日午後　皇太子殿下、大演習觀戰のため御野立遊ばされ、金谷少將の戰況言上を御聽取あらせられた所である今其の際御手栽の松は年毎にみとりを增し

て榮えて居る。

四五、加能松城趾

友枝驛の南十四五町。友枝村大字東上の城山にある。天文の頃には内尾伊豆守親賢、天正の頃よは其の子兼元が居つたが、天正十六年三月、黑田氏と唐原村の觀音原の戰後、友枝大膳蒸の弟新兵衞と共に黑田氏よ降つた。此の友枝新兵衞の女は内尾兼元の室であつたので、兼元が黑田家に仕へて所々に勤めて居た間、雁股と加能松との兩城を預つて居たが、後病死した。黑田長政朝鮮征伐から皈つて、其の死して嗣なきを聞き、始め兼元が人質として女鶴千代を中津の黑田家に出してあつたのが新兵衞には孫に當るから、土佐井孫左衞門の子仙千代に取合せて新兵衞のあとを嗣がせ友枝小次郎と稱へさせた。今の大村友枝家の先祖は此の人で

ある。

四六、松　尾　山

宇島驛の南三里。友枝村大字西友枝にある。山上に三社神社と言ふがあつて、天照太神、大己貴命、少彦名命の三柱を祀つてある。此の山はもと山伏の居つた所て神社を俗に松尾權現と言ひ松尾山記に「本尊釋迦牟尼如來、大悲十一面觀世音、藥師如來」と見えて居る。つまり兩部神道だから祭神もあやしい。由來記に「松尾山開基行妙阿闍梨云々第二世、來順法師云々聖武天皇御宇神龜五年能行上人當山春秋に峰踏始玉也云々」と見えつまり皇德天皇の頃行妙の開基である。然るを豊前國志には「松尾山、犬ヶ嶽の東に連り匡王寺在り大化年中能行上人開基にして彥山山伏に屬すとぞ、法頭を高明院と云ふ」とは年代に相違がある。能行は法

蓮の弟子で神龜頃の人なることは、豊鐘善銘錄にも「釋能行不レ知二何許人一也嘗隨二法蓮和尙一干二彥山般若窟一精二研行法一神龜五年春登二豐之松尾山一云々」とあるに依つても知られる。此の神社ばもと西友枝、中川底、下川底三ヶ村の產土神であつたが今は西友枝から祭つて居る。同山中ノ坊の當家開闢舊記と言ふに「吉臣鄕、友枝庄々々、永祿七甲子年六十余州共古社古社に朝廷より勅使拜參あり、此時當山にも今城中納言定經鄕御勅に拜參あり云々此の時八屋に一泊八屋より當山に社參、一の鳥井大松の本にて暫く御休足有て御裝束御食替にて御社參あり此の時代一の鳥井の大松誠に盛なる見事松迚御褒美なり、此時松と云字を勅免罷可レ成る昔の先尾山を是より松尾山と改るなり」とあるより見れば始めは先尾山と言つたものである。

四七、雁股城趾

友枝驛より西南三里。友枝村大字西友枝字大入にある。山頂二つゝ分れて居るから雁股の名を得たとの事である。畑氏三代居り、其の後下毛郡長岩城主野仲氏の抱城となり、支族友枝隼人佐か居つた。然るに天正十六年三月、其の子友枝大膳蒸と黒田氏に反き、唐原村觀音原に討死した。

四八、唐原の梅林

宇の島鐵道中唐原驛の東二町、唐原村字水出と言ふ所にある。梅林として花時杖を曳く者が多い。其の中の老梅を大梅一名鎧梅と言ひ、周圍五尺計りある。其の他鹿角梅、兜梅、梓弓梅、庄屋梅、圓入梅等がある。

四九、傾城石

唐原村大字原井、妙圓寺の上の山にある。宇の島鐵道原井驛から往くが便利である。こゝは原井と友枝村大字東上との境で俗に此の峠を傾城越と言つて居る。傳へ言ふ、昔京都の美妓が情夫を慕つて此の地に來り、終に變死して此の石となつたと。一種の奇石で男子ならば子供でも此の石に登れば動き、女子ならば動かぬと言つて居る。又此の石の邊に石塔がある。ついた杖を投げ捨てゝが、夫から芽をふいて巨樹となつたとか。此の邊ゝ京清水と言ふがある。之は美妓がむすんで息をついたからだと言ひ傳へて居る。

五〇、弘法窟

唐原村大字原井字有野、宇の島鐵道の終点耶馬溪驛附近にある。屏風のやうになつた岩壁を穿つて中に弘法大師の像を安置してある。窟の上に春蛇秋蚓の黒痕が

かすかに見られる。是れは往昔弘法大師が諸國巡錫の途次對岸の樋田から筆を投じて書いたのだと傳へて居る。近頃此の邊を公園とし、弘法公園、投筆公園などと言つて居る、

小笠原長勝

投筆のすさびゆかしく岩の面に
のこりて見ゆる水莖のあと

築上史蹟名勝案内終

福岡縣教育會長兼
福岡縣會議長參事會員
神崎動
築上郡山田村

陸軍騎兵大佐正五位勳四等
築上郡在鄉軍人聯合分會長

高橋喜七郎

築上郡黑土村

八屋銀行常務取締役兼
宇嶋鐵道監査役

水野與市

築上郡黑土村

福岡縣築上郡黑土村
銀杏酒類醸造業
ヒ 郡司掛昇

福岡縣築上郡黑土村
千代鶴
紅梅正宗酒類醸造元
ソ 郡司掛一郎

宇鐵友枝驛前
松屋旅館
館主 松本竹二郎

築上郡唐原村
宇鐵終点
耶馬觀光
御支度所
前鶴旅館

築上郡山田村
神崎喜三郎

築上郡八屋町
織部重範

豐前松江驛通リ西三丁
小兒科
產婦人科
松浦醫院
院長 長崎醫學士
松浦俊雄

▲畑の冷泉

角田村字畑の冷泉は湧出多量近時有名となり暑夏の避暑として最好適地にて諸病に効驗顯く松江驛より約一里二十丁にして仝地的場幾平氏の經營せる旅館、茶屋あり交通至便にて此地に遊ぶ者踵を爭ふの有樣なり

前宇島町長　小川勇次郎

氏は築上郡南吉富村大字宇野父小川逸平氏の長男に明治二年三月十三日に生る母テフ兩親の養育至り若年七才にて其當時の大家垂水儀十郎氏に付て手習を始め數年にして父逸平氏は感ずる所有りて垂水氏と相謀り三間に七間の草葺に板張と云ふ風で塾舍を建築した數多の門弟を養成し氏も之に學びたるが時代の進運に伴ひ年々學童の增加と共に塾も改まつて學校と云ふに變じ現今の小學校が夫れである氏は少年にも似ず其間一心勉學怠りなく續いて中津鷹匠町近藤漢學者の門に入り尙卷を閲し年十八才にして實家に歸へり弟丑太郎氏と實業に從事する事多年明治二十九年四月一日秋吉南吉富村長の推選に依り氏は隣村東吉富村書記に就職其の傍ら勉學に怠りなく明治三十二年十月大分地方裁判所に於て普通文官試驗に登祿

し翌三十三年六月十六日築上郡書記に任せられ其當時の郡長は高橋永種氏にて氏は庶務課の椅子に有る事六年にして多事多端なる居村に歸任するの止むなきに至り翌三十九年南吉富村長に推されて當選す折柄大迫桑野二個の溜池新築費貳万五千圓事業に當りては幾多の困苦を突破し首尾よく成功を告げ四十三年十一月滿期退職す其間數多の公共事業に貢献したる功蹟顯著なるものあるより明治四十四年五月左の感謝狀を贈呈せらる

感謝狀

元南吉富村長　小川勇次郎君

君ハ明治三十九年本村々長ニ推サレテ就職ス折柄本村ハ溜池新築工事半ニシテ百般ノ事務輻堆シ村債亦嵩ヲ增セルノ時ナリキ然ルニ君

ハ非凡ナル熱誠ト絶倫ナル手腕ヲ以テ此錯綜セル事務ニ當リ裁決流ルヽガ如ク日ナラズシテ百事其緒ニ着ケリ然レトモ未ダ民力ヲ休養スル餘裕ナキ謂ユル太刀ヲ拭フ暇無カリシノ時續イテ敎育法令ニ改正ヲ來シ爲メニ校舍增築ノ必要急ニ迫レリ君ハ毫モ逡巡スル處ナク洞渦セル財政ヲ縱横ニ裁斷シ傍ラ時勢ニ伴フ校舍新築ノ計畫ヲ建テ四十三年八月起工シ校舍ノ一半ハ君ノ在職中ニ竣工シ亦隆々完備セル校舍ヲ今日ニ見ル是レ全ク君ガ苦辛慘憺盡瘁企畫ニ礎ケルナリ仍テ其功績ヲ嘆美シ村會ノ決議ヲ以テ感謝狀ヲ贈呈スル所以ナリ

明治四十四年五月十五日

南吉富村々會議長　筒井惣十郎

明治四十四年象望を負ふて郡會議員に推選せられ參事會員に進み大正三年に第一期にて職を辭す

然して大正八年二月宇島町長に推され執務熱心至らざるなく大正十年五月東宇島町の大火に際して多忙なる町當局の小川氏は寢食を忘れ火災の前後策に就て憤勵努力せしは今尚吾人の目に新ならざるべし

仝年十一月氏は家事上職を辭したるが氏の將來は尚洋々たるもので有る

築上郡會議員　吉村鐵臣

築上郡友枝村屈指の素封家吉村鐵臣氏は明治十八年十二月に孤々の聲を揚ぐ各地に修學大に精研を積み溫厚寛和にして地方信賴篤く至誠德行にして二豐の天地に

活躍し大に見るべきなり

氏は貧富貴賤と雖も同一恭謙敬讓なるは氏の雄才高韵にして實に淸節以て百世を風勵すべく實に俊秀卓傑の士にして德高く而して氏は陸軍主計從七位にして大正三年日獨開戰靑島占領の際に遠征して勳功を奏し更に勳六等の恩命を授けられ現今仝村在鄕軍人分會長として大に活動して居る又築上郡會議員、村會議員、郡是製絲及宇島鐵道等の重役にして其他に關して地方發展の爲め貢献する處有り氏は家政の餘暇もて史蹟名勝の調査研究に嗜み斯道に造詣深く數種の古蹟遺物を邸內に陳列せるは大に古昔を偲ばして益する處多大なり

又多事多端なる

氏の殖林事業たるや常に木材產出を唱導するにとどまらず氣候の調和、水源の涵

養等に重さを置き間接的に國土保安上與ふる事甚大なり氣象學を孰知せる氏は天變の災危を防ぎ一ッは里余の原野に殖林たるは無限の寶庫を造り他日の基調を爲す英敏なる觀察を下したるものなり

分院　八屋町郡役所前

齒科醫　池部三郎

本院　中津殿町一丁目

豊州の天地に雄飛しつゝある齒科醫池部三郎氏は温厚篤實の士にして地方の信頼篤く氏は日本齒科醫鼻祖小幡英之助氏の一門にて多年斯道研究造詣深く其効成り明治三十四年秋季齒科醫術試驗に登錄せられ仝年鄕里中津町に歸へり今の殿町に

開業せらるゝに至りたる者也更に氏は隣縣築上郡内に其當時齒科醫の無きを憂ひ開業後間もなく地方貢献的八屋の八幡町に分院を開業せらるゝに至りたり之れ仝郡の齒科醫の先驅にして本院と共に日々隆盛を見門戸に絶えず患者の蝟集しつゝ有るが氏の其の技術たるや精巧優秀で伎倆卓越又地方先覺者となり師道者となりて門弟を養生して齒科醫師に成効せし者數人を有し爾來業に熱心盡瘁する賜にて尊崇の念を生せしめて今日に至り本院開業して二十有餘年分院開いて十七年の星霜を經過し地方無二の歴史有る成効の齒科醫師で氏の前途や尚ヨリ多くの盛況を呈する事豫期せらるゝに必せり而して本院は中津驛より四丁、分院は字島驛より二丁の距離にあり

フジヲ醬油釀造元　尾家悅藏

築上郡三毛門村

醬油釀造界の覇王として其權威を保ち好評嘖々たるものは築上郡三毛門村字沓川尾家悅藏氏の「フジヲ」醬油で有る仝店の醬油は其創業實に文政元年正月に有り其釀造の聲價は地方得意を占め漸時其販路は擴拓せられ幾多の實驗家に就て範を聞き品質改善は仝店の着眼にして嗜好に適する良醬油の釀造を企て今日の旺盛なるに至らしめたるは之れ祖先傳來の遺業を繼き現當主人悅藏氏の憤勵有るものなり氏は築上郡醬油釀造組合長の職を負ひ各地の釀造所を視察して大に發明する所あり爾來熱誠を以て業に當り矯揉刻勵の至らざるなく茲に螢窓雪案の功を顯はし。

明治四十四年十一月　明治天皇陛下の九州に行幸あらせ給ふや畏くも仝店釀造醬

油を御嘉納あらせられ又明治三十九年十一月凱旋五二共進會の開催せらるゝや今上陛下の御買上の光榮を蒙り又明治四十四年十月陸軍第六、第十二、第十八の三個師團工兵特別演習大分縣日出生臺に於て開催せらるゝやに際し實に納入方を仰付けられたるより氏は需用の一部を寄贈せしが教育總監部落合中將閣下より感謝狀を賜はるの榮譽に欲したるが之より先き仝店は明治三十九年海陸運輸の便を藉りて九州各縣附近を始め遠く滿州台灣に拓き仝年十月より第十二師團管下の各隊及衞戍病院專納下命の名譽を擔ひ大正元年鐵道院に消費組合の設立せらるゝや九州管理局管内の各組合に專納を命せられ大正四年三月より台灣膨湖島重砲兵隊其他の殖產工業會社に納入する事となり

其間に於て仝店の釀造醬油が各地の共進會や博覽會等に於て賞を受くる事進歩大

賞併名譽金牌三十餘個銀賞牌四十三個の多きに達し如何に仝店の「フジヲ」醤油が覇を締めて居るかは推して明かなるべし

又仝店主人は使用人を愛撫し左の項を常に遵守せしめつゝあり卽ち

「掃除をせよ」「火を用心せよ」「物をそまつにするな」

と云ふ三個條にして更に使用人は杜氏の指揮に從ひ相互間の禮を重じ、爭論を禁じ、質素儉約を旨として一切の冗費を省き、食事中の暴言を愼み、不謹愼の所爲を行ふべからずと常に服膺せしめて左の歌を揭げ有り

天は自ら助くる者を助く

誠實は幸福の母なり

とし店員には又使用人手牒を携帶せしめる如き地方實業界に無雙の模範店舗なる事は今更喋々の言を有せざるべし

又仝家は農業に有りても數千の小作人を常に愛護し農事改善に勉め奬勵は氏の專念にして年々小作米品評會の擧あるは實に賞賛すべく向後店運と共に益々隆昌に趣く事期して待つべきなり

書籍、新聞販賣　並石炭商

辛嶋並明

築上郡宇島町

電話五一番

振替福岡三三三〇番

築上郡宇島町の商業樞要の位置に有する店舗は辛島並明氏で有る君は資性温良德實、天凛の才士なり

幼年より奮鬪的の頭腦を有し明晰卓見なる君をして郡内は元より北豐に於て一として知らざる者なく只宇島の辛島と云へば名を言はずともがな君の信用と人格は相俟ちて二の句を爲さずとも知らざる者無き迄信用を博し眞に現代的重鎭の伸商で有る君は嚴父並家氏の遺業を繼ぎ書籍、新聞販賣を業とし又宇島埋立地に山なす石炭は日豐方面を主とし販路廣く實よ地方獨特占有者にして名聲嘖々たる者である先年君は商業革新とし新聞販賣部は宇島驛附近に出張所を設け其任に當り又令弟實氏はヨクモ家政に助力し實兄と相俟ちて商機を見るに天才的英繁なり昨年迄は青年會長として町青年の爲め大に指導し先輩者となりて功勞顯著なる者有りき今後益々商運隆々刮目よ値すべく建在と努力を希望して已ます

築上郡三毛門村
郡是製絲株式會社宇島工場

振替福岡一四二五四番
電話八屋一一一番

福岡縣築上郡宇島町の東端三毛門村字沓川に嶄然として頭角を顯はし烟突林立し其尖端◉印ハ一ッの權威標章を示せる郡是製絲株式會社宇島工場である仝工場は從來築上製絲會社として經營し居たりしも大正十一年二月本社京都府何鹿郡綾部町の郡是製絲株式會社に合併したもので本社の起原は實に明治十九年農商務省令蠶絲業組合準則に基き設立せるが其當時事業として斯業上積弊の矯正を計ると共に傳習所及共同揚返所を開始して技術者の養成或は產額の增加と品質の改良とを計りたれど尙ほ發展の餘地尠なからざるより更に生產消費

の兩方面の施設研究に俟たざるべからざるに依り時に一ッの機關製絲場を設立するの必要を認めたるものが是れ仝社の創立の起原なりきされど偶々明治二十七八年戰役の經營として事業熱勃興の時に際會し好機逸すべからずとして茲に明治二十八年十月發起人會を開き設計定款の議定を爲したるが其資本金九萬八千圓〈壹株金貳拾圓〉とし產繭額參千五百石を一手に引受けて製造し得べき百六十八釜の工場を設け而して蠶業十年計畫卽ち當時蠶業家參千五百戸一戸平均收繭壹石なるを戸數一倍半〈五千二百五十戸〉として平均收繭二倍〈二石〉に進めて總產額壹萬〇五百石迄增加せしむる豫定に對し漸時五百〇四釜迄擴張すべき設計を建て特に此誠實を以て經營する事とせり

明治三十七八年戰役の財界に未曾有の恐慌を來たし金融界攪亂と共に四園の事情

は仝社をして

單獨機關たらしむるに止まらず餘裕多き地方產繭を引受けざるべからず狀勢となり以て茲に創立當始の計畫を變へ本工場の改造を一新せしむべく適當の地に分工場を設置するの方針となし此趣旨にて尙蠶種製造をも兼營することとしたり

之より先き明治三十三年より輸出羽二重の製造を兼營せしが其後力織機の發明改良等に依り固定資本を投じ大規模の經營を爲すに非らざれば自營困難なるより止むなく明治四十四年十月より一時之を休止する事とし折柄資本金の增加必要に迫り九萬八千圓なりしを其四分ノ一卽ち貳萬四千五百圓の拂込みとなし其後四十三年園部、和知、兩工場を設置するの隆運に至りしかば茲に新工場所在地の蠶業家より千百株を募集して貳萬貳千圓の增資を見るに至りしなり

不幸にも大正三年歐州大戰亂突發するや經營上世界的の大恐慌を惹起し糸價暴落の悲運に陷入して之に蒙むるの狀態となりしも勇往邁進的從來の六千株の壹株貳拾圓なりしを特に積立金より參萬圓を振り替へて貳拾五圓とし糅て二株を、一株にして五拾圓株を參千株組織として重役及社員一同にて四拾五萬圓の增資を斷行せしが折柄財界沈睡となりしにも拘らず一般の信賴と義俠的に由りて意外の好成績を得るに至れるは喜ぶべき事にして

大正四年糸況回復し遂に事業の基礎漸く鞏固となりしも更に一大飛躍すべく五年增資の便法を計り姉妹會社とも云ふべき仝種異体の第二郡是製絲株式會社（資本金四拾萬圓）を創立して直ちに之と合併せしが尙

大正七年蠶營製絲、福知山製絲、舞鶴製絲の三株式會社を合併して

大正九年三月社界の大勢に順應し資本金貳千萬圓となして今日に至る隆盛を見るは歷史ある沿革を有す所以なり

畏くも明治四十年五月十一日仝社は　今上陛下　東宮にあらせらる際山陰行啓の途次御使を差遣されたるの光榮あり又

大正六年十一月十六日　皇后陛下御行啓工場及製產品を御台覽あらせられ社長へ七寶燒香爐、會社へ金壹封を御下賜ある光榮を蒙りたり斯くして今や宇島工場の繁榮は逐日擴大し旭日昇天の勢にて發展しつゝ有るは實に欣喜置くあたはずの至りなるべし之一朝一夕の事業に非らず職由する實に深遠幾多の難事を避けて堅實となりたるに至りたるものなり又仝社の敎育及衞生に於ては國家社界天道人意より敎育の大切なる事を論じて修身、算術、讀書、裁縫の四課をして敎授しつゝあ

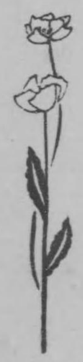
るが

明治四十二年現部長川合信水氏を招聘して人格の修養に計り大正四年に左の至誠訓を制定して社訓となしたり

一以貫之
至誠通神

一最高の天道を信じ
二最上の人格を養ひ
三最善の勤勞を盡し
四最良の貢献をなす

洵に前途有望なる仝社の盛運は實に嘱望に價ひするものなるべし



宇島鐵道株式會社
宇島驛長 高田倉太
仝營業長 高橋喜七郎
外社員一同

郡是製絲株式會社
宇島工場
場長 甲斐肇

築上郡築城村
福田益三

築上郡西吉富村
大神珍祥

築上郡八屋町
羽持大用

築上郡東吉富村廣津
嶋田壽海

福岡縣築上郡八屋町
株式會社 八屋銀行
電話八番

福岡縣築上郡宇島町
株式會社 宇島銀行
電話一〇九番

豐前八屋町
株式會社 築上銀行
八屋私書函第七號
振替福岡九六三七番
電話（一七番）

築上郡八屋町
株式會社 豐前銀行
宇島出張所
（電話七四番）

豐前八屋町
株式會社 中津銀行
宇島出張所
（電話六一番）

築上郡宇島町宇島驛前
二十三銀行
宇島派出所
（電話一九番）

福岡縣築上郡友枝村
株式會社 中津商業銀行
派出所

築上郡下城井村安武
共愛株式會社

福岡縣築上郡宇島港
坑木商 大木商店
電話（自宅五八番 事務所五九番）

福岡縣築上郡八屋町
外科 眼科 一般 西村醫院
（電話九番）

豐前宇島驛前
內科 小兒科 花柳病科 富松醫院
（電話四六番）

築上郡友枝村
大竹醫院

福岡縣築上郡千束村
產婦人科 久永醫院

福岡縣築上郡宇島町
醫師 島田高正

福岡縣築上郡黑土村
吳服太物商
田邊義治商店
（振替福岡一七〇八九番）

福岡縣築上郡宇島町
內科 小兒科 木村醫院
（電話一〇四番）

築上郡八屋町
やまと屋旅館
電話（店 二番 古椎 三十一番）

九州線宇島驛前
川 今悅運輸支店
（電話二〇番）

九州線宇島驛前
通 宇島運輸本店
（電話四番）
（電略〇ウ）

豐前國八屋八幡町
萬金物商 ヤ 古見保松

大阪商船株式會社
宇島荷客扱店主
小畑隆三郎
毎偶數日午前七時定期出帆
綠川丸
龍田川丸
高神丸
高松丸

築上郡宇嶋町
わ 渡邊製壜所
（電話　）

築上郡友枝村
清酒 立田川
高野興兒

豐州線宇嶋驛前
耶馬觀光御支度所 高等旅館
橋本屋
（電話嶋二三番）

築上郡東吉富村廣津
萬小間物學校用品商
井上勝次

築上郡八屋八幡町
材木商 畑友平
（電話四七番）

豊前八屋町
清酒醸造元 浦野房二
（電話五番）

築上郡八屋町
清酒醸造元 丸江孝市
電信略語（OE）

八屋八幡町
筑前琵琶四絃五絃教授
出口旭陵

宇嶋驛前
本橋電氣商店

八屋菊屋旅館
重松キク
（電話二六番）

富
醬油醸造元
ヤバケイ樋田
小川省吾

下毛郡眞坂村
呉服太物小間物履物
椿勘十郎商店

大分縣下毛郡鶴居村萬田
米穀肥料商 細川元吉

豊前中津市外眞坂村白地
荒物、花莚、柳行李、革鞄、洋鏡台、夏屏風、洗板、莫蓙、蒲團、提灯、簾枕、雨傘、バスケット、上敷、家具
卸専業 サ佐々木商店

大分縣下毛郡鶴居村萬田
銘酒福壽醸造元
武吉本店

酸素吸入療法ノ効用

流行性感冒、肺炎、氣管支炎、喘息、**アンギナ**、**チフテーリ**、百日咳、神經衰弱、心臟麻痺、其他心臟疾患、「阿片、**モルヒネ**、**ストリヒニーン**、**チアン**化合物、酸化炭素等の中毒症」、其他**クロロホルム**、麻醉後、産後及內出血外出血等の急性出血、半溺死、假死及身体過度の疲勞等の塲合、臨終時の苦痛除去には特に有効

酸素
水素
製造販賣　宇島酸水素株式會社

福岡縣築上郡宇島町

（電話一一〇番）
（振替福岡五五七〇番）

酸素覇者電解式ノ品質

右ノ如ク諸症ニ卓効アル酸素モ之ガ品質ノ良否ニヨリ其効果ニ至大ナル關係ヲ有スルハ既ニ一般ノ認ムル所ニシテ此点ニ於テ電解式酸素ハ空中ヨリ採取シタルモノト其類ヲ異ニシ絶度實ニ**九九、八%**以上ヲ有シ酸素界ノ覇者トシテ東西斯界ノ認ムル所ナリ

商號　天　各種

石鹼製造合名會社

京都郡行橋町

近頃石鹼界ノ大好評ヲ博ス

天印ハ品質善良家庭向徳用

中津鐘紡通り

クボタ印刷所

活版石版……技術……優秀
迅速……叮嚀

◉郡内各町村長名祿

八屋町長　浦野岩吉
宇島町長　加藤松太郎
椎田町長　平塚又太郎
築城村長　松下彌壽彦
八津田村長　加來由太郎
葛城村長　中上孝太郎
西角田村長　丸山延治
角田村長　欠員
上城井村長　松本守雄
下城井村長　白川寅吉
山田村長　吉川謹二
三毛門村長　別府猛
黑土村長　矢幡小太郎
横武村長　恒遠清太郎
千束村長　有光八十馬
合河村長　廣崎藤十郎
岩屋村長　大邊右六
西吉富村長　鶴田正夫

友枝村長　島　益二郎
唐原村長　大森八郎

◉各町村立小學校長名祿

八屋尋高小學校長訓導　中川藏之助
宇島仝　重松市太郎
椎田仝　今田次郎
上城井仝　泉榮吉
寒田尋常小學校長訓導　矢島寛
下城井尋高小學校長訓導松下瀧藏
築城仝　高畑喜代藏
南吉富村長　秋吉藤之助
東吉富村長　矢頭軍司
小山田尋常小學校長訓導杉田嘉三郎
船迫仝　安藤一馬
八津田尋高小學校長訓導大村久吉
葛城仝　出口次郎一
岩丸尋常小學校長訓導　白川悟
西角田尋高小學校長訓導長谷川貞治
小原尋常小學校長訓導　吉田幸吉

角田尋高小學校長訓導　林房彦
畑尋常小學校長訓導　清水義種
山田尋高小學校長訓導　北崎丹三
川内尋常小學校長訓導　林川彦次郎
大村尋常小學校長訓導　永野瀧男
三毛門尋高小學校長訓導島田又太郎
千束仝　下村政雄
黒土仝　池田太一
横武仝　江野政男
合河仝　矢野菊藏
上川底尋常小學校長訓導藤末庄吉
岩屋尋高小學校長訓導　島本民藏
郷山尋常小學校長訓導　高橋茂
西吉富尋高小學校長訓導祐德茂
友枝仝　林輝雄
西友枝尋常小學校長訓導市川文太郎
東上仝　寺西猛郎
唐原尋高小學校長訓導　久永甫郎
原井尋常小學校長訓導　宮本半十郎
南吉富尋高小學校長訓導爲藤十郎

◉郡内各郵便局位置及局長名

八屋郵便局（八屋町）局長大林壽
宇島郵便局（宇島町）仝村田一九郎（無集配）
椎田郵便局（椎田町）仝榎本千代吉
松江郵便局（松江）仝渡邊牢九郎（無集配）
千束郵便局（千束）仝櫻木景一（無集配）
友枝郵便局（土佐井）仝大林清太郎
東吉富郵便局（小犬丸）仝森口良三郎（無集配）
合河郵便局（下河内）仝山田他二郎
安武郵便局（安武）仝平井喜一郎
傳法寺郵便局（上城井）仝平川辰治（無集配）
築城郵便局（築城）仝小田勝太郎（無集配）

◉郡外郵便局所在地

中津郵便局（中津町）
鶴居郵便局（三口）
樋田郵便局（樋田）

郡内各停車場より人力車の便ある外宇島驛より合河、岩屋、兩村に至る、椎田驛より上下城井村に至る、各自動車運轉の便あり

大正十一年十一月十五日印刷
大正十一年十一月二十日發行　（非賣品）

福岡縣築上郡東吉富村百五拾四番地
著作者　岡爲造

大分縣下毛郡眞坂村六百五拾六番地
著作兼發行者　佐知道直

大分縣下毛郡眞坂村四百拾七番地
印刷者　今富榮

大分縣下毛郡眞坂村四百拾七番地
印刷所　佐知活版社

393
458

後